

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果

令和6年度の共通テストは、例年同様、高等学校でドイツ語を学んだ受験者の基本的能力を正確に把握することを目標とした。高等学校学習指導要領（外国語編）で示される目標：「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能を養い、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、実践的コミュニケーション能力を養う等の目標の達成度を多面的に評価することを心がけた。

問題作成に当たっては、高等学校学習指導要領（外国語編）を基準に、高等学校教育の現場を参考にし、過去の共通テスト評価資料の分析も手掛かりにして、問題レベルを適正にするよう心がけた。出題語彙については、高等学校で初めてドイツ語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮した。並行して全般的に、具体的な状況においてドイツ語を理解し、自ら表現する力を問う問題を出题している。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

第1問：基本的な語の発音（母音の長短、子音の発音、アクセントなど）の習熟度や、基本的な文法知識及び語彙力の習熟度を問う。

第2問：基本的な文法知識に基づく文の運用能力を問う。

第3問：形態、統語、語用など複合的な作文能力を問う。

第4問：会話の内容を総体的にとらえ、話題となっている主題やそれに関わる重要なポイントを正確に読み取る能力、及び話題の展開に沿って登場人物の立場から問題解決の道筋を考える能力を問う。その他、日常会話の基本表現や基本語彙を活用する能力なども問う。

第5問：日常生活で頻繁に用いられる表現を多く含む会話から、特定のテーマや会話の流れを把握する能力、及び登場人物の発話意図を正確に把握する語学力を問う。

第6問：平易な表現で書かれた短い物語を読み、その概要を把握する力を問う。

第7問：比較的短い記事を読み、その概要・要点、論理展開、書き手の意見等を把握する力を問う。

全体の平均点は130.95点（100点満点換算値：65.47点）で、昨年の123.80点よりも上がったが、ほぼ同水準と見て良いであろう。各問題の設問数、配点及び得点率は次のとおりである。

発音・文法	第1問	7問	21点	62.8%
	第2問	8問	24点	59.7%
	第3問	4問	20点	53.9%
会話・コミュニケーション	第4問	7問	40点	77.7%
	第5問	6問	30点	74.0%
読解	第6問	5問	30点	63.8%
	第7問	7問	35点	57.5%

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

出題に用いたドイツ語の総語数は、前年度と同程度となったが、総語彙数は比較的抑制され、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という）から、「総語彙数は適切だと評価することができる」とのコメントがあり、同時に難易度の高い語彙については「昨年度に比べて難語がやや増加したものの、そのために受験者が全体的な文意を取るための負担が増えたという印象はない」という評価を得た。また、高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という）からは、「語彙や表現に関する注は余りなかったが、挿入されている絵や本文に使用する語が工夫されていて、設問の日本語などから理解が進むような配慮を感じた」「昨年度の共通テストと使用語数はほぼ変わらない。難易度も同程度であり、読みにくさや取り組みにくさは感じない」というコメントを頂いた。

設問構成と出題形式については、「思考力・判断力・表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。全体的な出題形式について、教科担当教員からは、「今年度の共通テスト「ドイツ語」には、「適当でないもの」や「書かれていないもの」の選択、消去法を用いなければ正答に至らない形式、あるいは、本文には明示されていない事柄を想像して解答を選択せざるを得ない出題が多く見られた。このような出題形式を否定はしないが、出題するのであれば、本文内にある語や表現を注意深く読み取ることで、排除すべき選択肢が明確となるようにしてほしい」という要望を頂いた。また、設問のテーマに関して、ドイツ語教育部会からは「特に大問4の友達同士での動物園の見学、大問5の高等学校卒業後の進路などは高校生や大学生に身近な題材であり、若者の実生活に即したドイツ語を中心に出题されている。さらに物語や新聞記事などを出典としたテキストが出题されていることから、受験者は様々な文体の文章を読んでいることが推奨され、日頃のドイツ語学習の成果を問う問題であると評価できる」という評価を頂いた。今後はレベルの更なる適正化を図りたい。

第1問 主として単語レベルでの基礎的な発音、文法、語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問2では前年に引き続き、同一文中に現れる子音の発音について問うたが、ドイツ語教育部会からは「実際の文における特定の音の表れをリアルに示している点で、評価できる。難度も適切である」と高評価を得た。問4、問5は動詞の語形変化の問題である。問6では名詞の複数形の語尾を問うた。問7は、日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題とした。

第2問 実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため、基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し、難易度のバランスを工夫した。ドイツ語教育部会からは「全体として適切な難度」、教科担当教員からは「文法

事項を着実に学んだ受験者であれば正答を選ぶことができる」とのコメントを得た。

第3問 与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度と同様に今年度も設問数は4とした。共通テストの趣旨に鑑み、ドイツ語運用能力を総合的に問うことを目的にしている。各問のテーマは、日常的な話題から選ぶよう配慮したつもりだが、ドイツ語教育部会からは「語彙の選択と難度は適切である」と評価された。他方、6つの選択肢のうち5つのみを用いる出題形式については、教科担当教員から「不要な選択肢が1つあり、正確な文法の知識を問う出題となっている」との評価を得た。なお、2つの空欄とも正解しないと得点を得られない点については、次年度以降部分点を認めることも含めて検討中である。

第4問 留学時代の友人を訪ねた日本人のFumiが友人とともにドイツのTierpark（動物園）を訪れ、そこでの会話を読んで、設問に答える問題である。昨年度の問題について、その場面設定が「日本の若者にどれほど身近なのか、という点については少し疑問が残る」というドイツ語教育部会からの御意見を受けて、議論を重ねた上で今年度は「高校生・大学生も身近に感じられるテーマ」を選び、場面設定を行った。今年度の問題については「日本の若者にとっても比較的身近な題材と言える」との御意見を頂き、今後もテーマを選択する際には、受験者の多様性も考慮し、多角的な視点から検討していくことを心がけたい。個々の問題については、会話の全体的な流れを理解した上で、会話文内の語彙や表現の意味が解釈できているかを問うものとした。また、イラストについて、動物名など様々な語彙が出現することから、やや大きく紙面を割くことになったが、教科担当教員の方から「内容の理解が促進される」と評価された。しかしながら、イラスト挿入の意義については、場面や設問の性質に応じて、その都度、慎重に検討する必要があるだろう。

問1はin Ordnungという熟語の解釈を問うものである。問2では会話のやり取りについて、その内容理解を問うた。問3は会話の文脈を捉えられているかどうかを、イラスト（案内図）を手掛かりに理解を問うものである。ドイツ語教育部会からは「本文と案内図を組み合わせた良問」との評価を頂き、有り難い。問4は他の語で言い換えた適切な表現を選択することで、先行する会話文の内容を適切に理解しているかを問うものである。問5は会話の文脈から適切な反応を伝える表現を選択するものである。教科担当教員の方から「教科書で目にすることも多い表現という御意見を頂き、適切な難易度の問いとなった。問6はイラストを使って会話の中で説明される冷却装置についての解釈を問うものである。教科担当教員の方から「それ（ソーラーパネル）が絵の中に設置されていることを受験者に求めてしまっている」との評価を頂いた。確かに会話文中でより丁寧な説明がなされておく必要があった。イラスト問題については、問題としての適切さを十分に議論した上で、本文との関連性など様々な点を考慮し工夫していきたい。問7は会話の一連の内容に合うものを選択する問題である。

第5問 ギムナジウムの最終学年のJan, Hanna, Lukasの3人の会話を読んで、設問に答える問題である。3人は、まず卒業後に何をするつもりなのか個々の考えを述べ、次にアンケート調査の結果を見て、卒業後に何をするのがよいのか話し合っている。ドイツでギムナジウムを卒業する人がすぐに大学に進学するとは限らない。卒業後の進路はみな同じではなく、それぞれの違いを友達同士で受け入れて、最良の判断をしようとしている。そのため、卒業後にすぐに進学したい人、すぐには進学しないけれどほかにしたいことを決めている人、そして卒業後に何をしたいのかわからない人の3人が会話するという場面設定にした。テキストの量は昨年よりも多くなったが、日常的な表現を理解しているのか、会話の内容を正確に把握する能力を試す問題を作成した。しかしながらドイツ語教育部会から「ドイツ語圏におけるギムナジウム卒

業後の状況を知る必要があり、その点でやや難度は高いかもしれない」との御意見を頂いた。今後の問題作成に当たっては、予備知識の有無で問題レベルの難易度が変わらないように配慮することを心がけたい。教科担当教員の方から、テキストに「難しい語彙もあるが、前後の発話内容から類推できるような配慮がなされている」と評価を頂いた。

問1はJanの発話内容を正確に理解できているかを問うている。ドイツ語教育部会からet. hinter sich habenの言い換え表現を見つけられることが鍵になる良問だと評価を頂いた。また教科担当教員からは、hinter mir という表現から、学校生活が過ぎ去るイメージを持つことができるか、前置詞の持つ意味をイメージできるかを問う良問だと評価を頂いた。問2では、下線部③のAuszeitについて、Hannaが何をしようとしているのかを問うている。Auszeitの意味を知らなくても、①、②、④は会話に関係のない解答だと気付くと正解が分かる。問3は34に適切な数量を選ぶ問題にした。単に数字を選ばせるのではなく、半分、3分の1など割合の表現を理解しているかも同時に問うた。問4は、下線部⑤以降の会話内容を正確に理解しているのかを問い、会話では言及されていない活動をイラストで選ぶ問題である。問5は36に最も適切な文を入れる問題で、会話テキストの内容を正確に理解していなければ正答を導けない。また36に続くJanの発言内容を理解していないと正しい答えを選択できない。問6は、それぞれがギムナジウムを卒業してから何をすることにしたのか、会話の全体内容を理解しているのか確認できる問題である。Lukasはすぐに大学に進学すると明言しているので④は間違いである。またLukasはオペアとして働くと、住居と小遣いももらえると説明はしているが、本人がしたいとは言っていないことを読み取る力が必要である。ドイツ語教育部会から、「よく練られた問題」だと評価された。

第6問 第6問と第7問が読解問題となっているが、それぞれの設問で用いるテキストを別の文体のもの（今次においては第6問で物語文、第7問で雑誌の記事）を用いた。これは、現実のコミュニケーションで必要になる読解力を中心に、多角的に受験者のドイツ語力を測ることを目的としているためである。

第6問については、文章の流れや全体を把握する読解力を問うことを企図して、明確な筋を持つ物語文を題材とし、登場人物の行動理由や心理、物語の展開や結末の意味を読み解く問題を作成した。物語文の内容は、やや風変わりな癖を持つ男の物語だが、語彙をできるだけ平易にし、時制も現在形を用いることで、難しくなりすぎないように注意した。文字数も前年よりはやや少なめにした。

物語文を題材としたことに起因する問題として、男の風変わりな行動や心理の理由を説明させる問題の難度がやや高くなったかもしれない。ただしドイツ語教育部会からの指摘にもある通り、選択肢を丁寧に読み込めば正答にたどり着くことができるような問題に落ち着いたと思われる。また全体的な方針として、文章の複数箇所を総合的に理解して初めて正答にたどり着けるような思考力を試す問題を作ることを目標とした。その代わりに、ドイツ語教育部会や教科担当教員の報告書にあった通り、例えば問3、問4の正答について明確な確信が得られないというきらいがあったように思われる。ある程度意図したことであったとはいえ、うまくバランスの取れた問題が作れるよう、今後も工夫を重ねたい。

問1については、物語の流れを把握する力を問う問題である。例年正答率が低いため、本文の表現に近づけた選択肢を設けたが、それでもなおも難易度がやや高かったかもしれない。問2は主人公の男の独特な行動の理由を読み解く問題である。意表をつく論理ではあるものの、選択肢を丁寧に読み込めば、正答を絞り込むことができる。問3、問4は物語の展開や男の性格を正確に読み込んで初めて解答できる問題であるが、特に問4は物語文に特有の深い読解力を要する問題だっただけに、やや難易度が高かったかもしれない。問5は比較的正答にたどり着きやすい問

題だが、問1の選択肢と重複するとのドイツ語教育部会の指摘もあった。また教科担当教員からは誤答と判断するのが難しい選択肢があるという指摘を受けた。物語文を題材とする問題の性質と、総合的な思考力を問う問題作成方針から避け難いことだとも言えるが、明確に正答にたどり着くことができるという点も加味しつつ、よりよい問題作成に努めたい。

第7問 それぞれの段落の記述内容を正確に読み取れるか、また各段落で記述されている内容から全体の内容を有機的に理解できるかを問う問題を作成した。7問のうち5問は、問いと選択肢のいずれもドイツ語にすることで、ドイツ語での表現を正確に読み取れることが前提となる。

テキストは、13歳の少年Jonteが環境のために行った活動に関する雑誌記事を基に作成した。環境保護を昆虫（蜂）の生態系の視点から扱ったテキストである。日本でも「がちゃがちゃ」が青少年の間で人気があることから、これを環境のために使うという少年のアイデアは斬新であり、また、日本人学生にとっても内容を想像しやすいのではないかと考えてこの記事を選定した。問題作成に当たっては、できるだけ専門用語を使用せず、また、日本語の注を付ける代わりに（befüllen, Samen, umbauen/umgebaut）イラストとその活動を説明するドイツ語を補足することとした。このイラストの使用については、教科担当教員からは「本文の後に絵と絵の説明文が掲載されていることから、読みやすい」と評価されている一方、ドイツ語教育部会からは「イラストが難語の理解の助けとなることは評価できるが、この問題のように（イラストが）解答に直接結び付くような問いは避けるなどの工夫が必要」との指摘があった。イラストの必要性和設問内容との関連性については、今後の問題作成において検討をしていきたい。語彙の難度について、教科担当教員からも（indem, spenden, Lebensräumeなど）ドイツ語教育部会からも（befreien, insektenfreundlichなど）指摘があった。問題作成に際しては、すべての単語の意味を明確に記憶していなくとも、造語的あるいは前後の関係等から推測できることを目指した。第7問全体の得点率は約57.5%であった。昨年度の得点率が約57%であったことから、難易度に関しては変化はなかったと言える。

4 ま と め

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準ずるもの」とされ、当該言語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成部会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、良問の作成に向けて更に努力を続けていく所存である。なお、過去10年間の受験者数・平均点（100点満点換算）の推移は以下のとおりである。

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
受験者数	135	147	116	109	118	116	109	108	82	101
平均点	72.39	65.46	64.33	68.42	76.10	73.95	59.62	62.13	61.90	65.47